ヒポクラテス「医師の誓い」をめぐっての歴史的考察

今井正浩

ヒポクラテス（前四六〇～三七五年頃）の名のもとに伝わる医学著作集、いわゆる「ヒポクラテス全集」中には、「医師の誓い」（以下「誓い」と略記）として知られる有名な文書が含まれている。だが、これをめぐる従来の研究ではヒポクラテスの医学派との直接的なつながりを疑問視する傾向がかなり強く、とくにピュタゴラス学派からの影響をそこに読みとったり、あるいはたんに医師道の大義を述べ伝えることを目的とした架空の誓言文とする見方もある。そこで、ここでは歴史資料としてのこの文書の成立とヒポクラテス医学派との関係を改めて問い直してみたい。

一　禁止事項をめぐって

「誓い」にもり込まれた実地の医療行為に関する諸項目のなかには、(a)致死薬・堕胎具の使用禁止、(b)結石患者の場合を含めて切開手術を要するような治療はさし控える、などの規定がみえる。これまでは、「ヒポクラテス全集」中に以上の禁止事項に触れたものが含まれていることがよく問題にされ、それとの関連において、この二点をある特定の思想的信条に根ざしたものと解する向きが強かった。確かに、こうした側面に重点をおくなら、「誓い」の背後にはヒポクラテスの医学派とは直接関係のない存在、たとえば殺生そのほか身体に対する一切の加害行為を禁忌とみなすピュタゴラス学派的な医師集団をおのずと仮想せざるを得ない。

だが実際には、以上の規定をそうした観点から捉えることには問題がある。まず(b)の切開手術の是非については、これはただ「誓い」成立当時にすでに医学の専門分化が始まっていたことを示唆しているだけで、とくに高度な外科的処置はそれを「専門の業とする」医師たちに一任するという方針を打ち出したものにすぎない。一方(a)致死薬・堕胎具の禁止についての規定は、医師自らの「生活と技術と**が清く汚れないものとなる**」ためという宗教的文脈のなか

で語られているが、その背後にあるのは、殺人（致死薬、堕胎）を犯した者にふりかかる「穢れ」とその「浄め」という古代社会一般の宗教的観念である。以上のように、それらがある特殊な思想的状況を反映していると考える理由はなく、むしろ医学派内の医療行為一般に対する基本姿勢に根ざしたものとみるべきである。

二　「助ける、または害を与えない」

そのような姿勢を端的に表わしたのが、「自己の能力と判断のおよぶかぎり病人を助けることを目的とし、危害や不正を加えることはかたく慎しむ」という誓いの一節である。先にあげた諸規定と「ヒポクラテス全集」との内容的矛盾とか不一致がよく取りあげられるが、一般にいう「ヒポクラテス全集」が実際には時代も学派も異なるさまざまな医師たちの著作を集めたものである以上、この点を強調しすぎることには問題があろう。こうした漠然とした矛盾・不一致よりも、むしろ確実にヒポクラテス医学派に属する医書のなかに、「誓い」に打ち出された以上のような基本姿勢と密接に関連するものが見えるということのほうに注目すべきである。たとえば、古来ヒポクラテス自身の作とされる『エピデミアイ』第一巻第十一節には「病気に関してはつぎの二点に習熟すること。助ける、または害を与えない」という記述がみえるが、これは先に引用した「誓い」の一節の内容と字義どおり対応していると考えてよい。また同じく『エピデミアイ』第六巻第四章第七節における「診療に際しての配慮」に関する記述もこの基本姿勢にはっきりと通じるものがある。

三　「誓い」とヒポクラテス医学派

「誓い」の以上のような内容的側面とともに、そこにみえる医師団の姿にも注目したい。この誓言それ自体は医師ともともと血縁的なつながりを持たない者が弟子入りをする際に行うことを義務づけたものだが、そこにうかがえるのは一種の家族的職業集団としての医師団である。プラトンは『パイドロス』のなかでヒポクラテスを「アスクレピオス派の医師」と呼んでいるが、このアスクレピオス派という呼称は「アスクレピオスを始祖とする者たち」の意味で、これは「誓い」にみえる医師団のイメージとほぼ一致

する。もっとも、ダイヒグレーバーはこの文書の成立を紀元前五世紀の早い時期としており、それに従うなら、実際にそこには、ヒポクラテスの活躍した時期（前五世紀後半から四世紀初頭にかけて）よりかなり以前の状況が反映していることになろう。その点からも、ヒポクラテス本人がこの「誓い」を作成したと考えることはできない。だが、先にその一端を指摘したように、『エピデミアイ』諸篇をはじめ、後の医学の代表的な医書のなかに「誓い」の内容と関連する記述がみえることは、そこに明示された医療の原則を彼がはっきりと受けついでいることを示している。その意味で、ヒポクラテスの医の精神は、やはりこの「誓い」に表われているといってよい。

（東京大学人文科学研究科大学院）

アンブロアズ・パレの処女出版とその背景

大村敏郎

明年一九九〇年はアンブロアズ・パレ（Ambroise Paré, 1510?—90）の没後四〇〇年の年に相当する。近代外科の父として、また日本に伝わった西洋外科の源流として、この節目の年にパレを顕彰することを計画しており、本学会・日仏医学会・日本外科学会を通じて準備を進めているところである。

楢林鎮山（一六四八～一七一一）の『紅夷外科宗伝』（一七〇六）・西玄哲（一六八一～一七六〇）の『金創跌撲療治之書』（一七三五）・伊良子光顕（一七三三～一七九九）の『外科訓蒙図彙』（一七六七）、この三書はいずれもオランダ語訳の『パレ全集』をもとにした書物であることが知られている。しかしいずれの著者も、その内容を、オランダ人によってもたらされたオランダ医学として理解してお